

二〇〇九年度大学入試センター試験 解説 〈現代文〉

第1問 評論 栗原彬 「かんけりの政治学」(『政治のフォークロア——多声体的叙法』所収)

〔総括〕

結論を先に言えば、第1問の「評論」は昨年に比べてかなり難化したといえる。本文の読みにくさ、設問の意図のわかりにくさ、そして紛らわしい選択肢、と三拍子揃った難度の高い問題になっている。こうした傾向が来年以降も続くとなると、受験生はよりいっそう速くて正確な読解力を養成して対策を練る必要がある。

筆者の栗原彬くりはらあきらの専門は政治社会学。今回の文章は「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」などの「遊び」と「市民社会」「管理社会」とを結びつけて論じているが、内容的に受験生にとってはなじみがあまりなく、読みづらかったと思われる。

全体の文章量も昨年に比べて六〇〇字程度増加しており、例年以上に速読速解力を要求された。なお、文中に出てくる藤田省三氏は、一九八四年の共通一次試験(センター試験の前身)に出題された文章の筆者で、内容的にも今回同様「隠れん坊」の中に隠された社会性・アイデンティティなどについて考察したものだった。

問1の漢字は例年に比べて難易度の高いものが多く、日ごろしっかり漢字学習をしていない人は、何問か失点したはずだ。問2は傍線部前後で対比的に書かれている内容を理解できれば正解できるセンター頻出パターンの問題だが、受験生はこうした「対比」構造に弱く、失点した可能性が高い。問3と問4は筆者の論旨を的確に把握していなければ正解できず、標準～やや難のレベル。特に問4は問いの意図を理解したうえで本文を正確に読まなければ正解できない問題といえる。問5は傍線部自体の表現は難しいが、選択肢と本文とを比較対照しながら消去法的に解いていけば正解にたどり着ける。問6は、選択肢六つの中から正解を二つ選ばせる問題だが、選択肢がペアになっているのを見抜いて消去法を併用しながら解いていければ、うまく正解にたどり着けたはずだ。

〔解説〕

問1 漢字問題

昨年とちがって満点を取るのが難しいレベルの漢字が並んだ。問題になっている漢字もさることながら、選択肢の漢字も紛らわしいものが多く、漢

字に対する勉強量がそのまま得点に反映する難易度の高い問題といえる。単純に漢字が読み書きできるようになるだけでなく、文脈判断する力、同音異義語を区別する力などを付けるために、日ごろから多角的な漢字の勉強を心がけてほしい。

- | | | | | | | | | | | |
|--------|----|----|---|----|----|----|---|----|----|----|
| (ア) 恒常 | ◎① | 恒例 | ② | 貢献 | ③ | 振興 | ④ | 均衡 | ⑤ | 小康 |
| (イ) 変換 | ① | 勧誘 | ② | 寛大 | ③ | 鑑定 | ④ | 帰還 | ◎⑤ | 換気 |
| (ウ) 多寡 | ① | 豪華 | ② | 負荷 | ◎③ | 寡黙 | ④ | 貨物 | ⑤ | 過分 |
| (エ) 猛然 | ◎① | 猛火 | ② | 妄想 | ③ | 網羅 | ④ | 本望 | ⑤ | 消耗 |
| (オ) 交錯 | ① | 昨日 | ② | 作為 | ③ | 削除 | ④ | 索引 | ◎⑤ | 錯誤 |
- 正解 (ア) 1 ① (イ) 2 ⑤ (ウ) 3 ③ (エ) 4 ① (オ) 5 ⑤ (各2点)

問2 やや難

傍線部A「たしかに『複数オニ』や『陣オニ』はおこなわれているけれども、それらはもはや普通の隠れん坊の退屈さを救うためにアクセントをつけた、といったていどのことではない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

まず、傍線部Aの意味をちゃんと理解できたかどうかのポイント。傍線部Aの内容を端的に言うと、「『複数オニ』『陣オニ』と普通の隠れん坊とは、根本的に質の違うものだ」という意味だ。それがわかれば、「普通の隠れん坊」の持っていた意味が何か、それに対して「複数オニ」「陣オニ」の持つ意味とは何かを本文から読み取ればよいことになる。

まず、「普通の隠れん坊」の意味は、傍線部Aの手前に書かれているので、まとめてみよう。

◎「普通の隠れん坊」の持つ意味

- ・ 人生の旅を凝縮して型取りした身体ゲーム
- ・ 一度社会から引き離され、その後、仲間のいる社会に復帰する非擬似的な死の世界から蘇生して社会に戻る
- ・ 子どもたちが相互に役割を演じ遊ぶことによって自他を再生させつつ社会に復帰する演習の経験

次に「複数オニ」「陣オニ」の持つ意味は、傍線部Aの次の段落と、その次の段落に書かれているので、まとめてみよう。

◎ 「複数オニ」の持つ意味

・ 「裏切り」が主題

・ 裏切られることへの不安から仲間意識が脅かされる

・ 仲間にスパイを抱えた逃亡者集団

◎ 「陣オニ」の持つ意味

・ 「自分だけ助かればよい」ゲーム

・ 社会秩序の中心と私的エゴイズムとを結びつけるための単独的な冒険

以上をみてわかることは、「普通の隠れん坊」の持つ意味とは、「人生の旅の凝縮」「社会からの離脱と復帰」という遊びを超えた深い意味であるのに対して、「複数オニ」「陣オニ」のほうは、単に「裏切り」や「自分だけ助かればよい」というゲームに過ぎないという点である。

そして、「普通の隠れん坊」がそうした深い意味を持ちうる前提となっているのが、一度社会から離脱した後に、再び仲間のいる社会に復帰するという点にある。そうした説明になっている選択肢は③で、これが正解。

①は「人生の行程が凝縮して経験される苛酷な身体ゲーム」とあるのが×。「複数オニ」「陣オニ」は決して「人生の行程が凝縮」されたものではない。

②は「複数オニ」や「陣オニ」が「捕まった者も助かる契機が与えられている」とあるが、これは後に出てくる「かんけり」のルールなので、×。また、「複数オニ」や「陣オニ」が「擬似的な死の世界から蘇生する象徴的意味を内包」しているところがあるが、「擬似的な死の世界から蘇生する象徴的意味を内包」しているのは「普通の隠れん坊」のほうなので、×。

④は「複数オニ」や「陣オニ」が「管理社会のコスモロジーに主導された遊びに変質」したとあるが、これは「高オニ」も含めた行き着く先の「人生ゲーム」のもつコスモロジーであり、傍線部Bのあとに書かれている内容なので、この傍線部Aの段階ではまだ筆者は考察しておらず、×。

⑤は「従来の隠れん坊の本義であった、相互の役割を守りつつ競い合う精神」とあるところが本文には書かれていない内容で、×。

正解 ③ (8点)

6

問3
標準

傍線部B「『複数オニ』『陣オニ』『高オニ』の行き着く先が『人生ゲーム』といえるのではないか」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

まず、問2で整理した「複数オニ」「陣オニ」に続き、本文で説明されている「高オニ」についてまとめてみよう。

◎「高オニ」の持つ意味

- ・人より高い位置に立つこと、より高みをめざすことがポイント

「高オニ」は、隠れん坊の系譜からはずれた身体ゲームのなかで「子どもたちに好まれている」ものである点を踏まえると、「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」の行き着く先である「人生ゲーム」にもっとも近い意味を持つものが「高オニ」であると考えることができる。

したがって、ここでの「人生ゲーム」の中心的意思是、「高オニ」の意味である「人より高い位置に立つこと、より高みをめざすこと」だと考えられる。お金を操作することや他人を蹴落とすことは、最終的に人生の到達度を高めるための手段であり、「成功の頂点は億万長者、ついで社長で、最底辺は浮浪者である」「その間に：地位・職業が位階づけられて配列されている」と書かれているように、より高い社会的地位や職業、金銭的成功をめざすのが「人生ゲーム」の意味だといえる。

また、「複数オニ」の主題である「裏切り」や、「陣オニ」の持つ意味である「自分だけ助かればよい」「私的エゴイズム」という側面も「人生ゲーム」へとつながる部分を持つていると考えられる。

以上を踏まえて選択肢を見ていくと、①は「他者からの不信感を払拭するすべを学ぶ」が正反対の内容で×。

②は「他人を蹴落とす孤独に対処する」はいいとしても、「他者から疎外される寂しさに耐える」が本文に書かれていない内容で×。

④は「他者への不安と信頼」とあるが、「信頼」が×。「複数オニ」の主題は「裏切り」であり、「陣オニ」も「私的エゴイズム」の「単独行的な冒険」なので、「他者への信頼」はまったく無いといっていない。

⑤の選択肢の内容はちよつとわかりにくいかもしれないが、「陣オニ」について説明されている段落を正確に読むと、「陣オニ」における「陣」は社会秩序そのものであり、「陣」に触れることは自分を守ってくれる秩序へのコミットメント（関与・参加）であると書かれているので、選択肢中に「社会秩序の不安定さを感じとる」とあるのはおかしいことになる。「陣オニ」の目的は、自分を守ってくれる社会秩序への参加を競争して獲得すること

とにある。

残る選択肢③は「他者と競争してより優位に立つ経験をもつ」「社会的成功を利己的にめざす」と書かれており、本文の内容に一致するので正解。

正解 7 ③ (8点)

問4 やや難

傍線部C「飽きることに飽きてしまう一瞬が子どもたちを訪れる」とあるが、ここで子どもたちはどのような状態にあると筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部Cの「飽きることに飽きてしまう一瞬が子どもたちを訪れる」の意味をつかむことが最優先する。この傍線部の意味が理解できないと正解するのは難しい問題だ。

問3でみた「複数オニ」「陣オニ」「高オニ」「人生ゲーム」も、玩具産業が次から次へと繰り出してみせる新しいゲームへと関心が移れば、「ダサイ」遊びになってしまう。そこで子どもたちは新しいゲームに夢中になるわけだが、いったん新しいゲームに興じても、それは単に目先を変えたものだけに、次から次へと飽きてしまう。しかし、この「飽きる」こと自体も商業主義のコスモロジーであり、子どもたちは飽きることの中毒症にかかってしまう。つまり、子どもたちが「飽きる」ことによってまた新しいゲームが売れるので、玩具産業としても子どもたちに次から次へと飽きてもらわなければ商売あがったりというわけだ。

しかし、ついに訪れるのが「とことん飽きたとき」、つまり「飽きることに飽きてしまう一瞬」である。この段階での子どもたちは、次から次に売り出されるゲームの背後にある商業主義のコスモロジー自体に飽き、違うコスモロジーを持つ別の遊びを欲することになる。

傍線部Cの「飽きることに飽きてしまう一瞬が子どもたちを訪れる」というのはまさにこの瞬間のことであり、子どもたちの置かれている状態とは、今も書いたように「商業主義のコスモロジー自体に飽き、違うコスモロジーを持つ別の遊びを欲する状態」にあるといえる。

選択肢でそうした説明になっているのは②で、これが正解。ただし、この選択肢を選ぶにはかなり正確な読解が必要であり、選択肢の中にある「管理社会のコスモロジー」というのは、「商業主義のコスモロジー」と同じものを意味していることをつかむのも大切。

①はかなり紛らわしい選択肢。傍線部Cの後に書かれている内容を読むと、管理社会のコスモロジーを持つ遊びに飽きた子どもたちは「思い出しただよ外に出てくる」ことになり、三角ベースやサッカーを始めたり、「陣オニ」や「高オニ」をして遊んだりするのだが、結局はそこにも商業主義のコスモロジーと同構造のコスモロジーがあるだけだと感じ取って、子どもたちは急速に熱中度を失うことになる。とすると、①の「異なるコス

モロジに参入することになる」は言いすぎで×。結局、外での遊びも室内ゲームと同じコスモロジに過ぎないことに子どもたちは気が付くので、傍線部Cの状態というのは、正解の②のように「別のコスモロジに基づいた遊びに向かう可能性を手にする」というレベルに過ぎない。

③は「戸外での遊びにも飽きてしまった」とあるが、この段階ではまだ戸外に出ていないので×。また、「あらたなコスモロジを身体性のうちに見いだそうとしている」というのもまったくの間違い。

④も紛らわしい選択肢で、「商業主義のコスモロジ」＝「管理社会のコスモロジ」という点を読み取ったところまでは正しいが、「あらたなコスモロジが内包された遊びを楽しめるようになっていく」の部分で×。①と同様に、新しいコスモロジを求めて戸外に出て遊んでも、結局同じコスモロジしかなかったことに気が付くことになるので、「あらたなコスモロジが内包された遊びを楽しめるようになっていく」とは言えない。

⑤は「別のコスモロジに出会ったとしても、もはや遊びへの熱意を失ってしまっている」が×。「遊びへの熱意を失ってしまっている」のなら、新しいコスモロジを持つ遊びを求めて戸外に出ることはないはずだ。

正解 8 ② (8点)

問5 標準

傍線部D「隠れた者が囚われた友を奪い返して帰って来ようとするのは、つねにアジールの方、市民社会の制外的領域である」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部D自体の表現が難しく、何が問われているかをつかむのに苦労するが、小六の少年が言っている「かんけり」についての発言をしっかり整理して読み、本文と選択肢とを比較していけば正解にたどり着ける。また、選択肢がすべて同じような形式になっていることに注目し、選択肢を要素に分けて本文と対照しながら「消去法」で落とししていくのも一つの手だろう。

まず、すべての選択肢に共通する「かんを蹴って友を助ける行為」が何によってもたらされたかを本文から読み取っていくことが大切になる。

小六の少年が言っている「かんけり」は、隠れているとき「羊水に包まれたような安堵感」を感じていて、「根源的な相互共同性に充ちたコスモス」の中にいると述べられている。しかし、ただその中にぬくぬくとしているだけではなく、仲間との連帯意識に基づいて「つかまった仲間を助けなくちゃって、夢中になるのが楽しい」とあるように、かんを蹴って仲間を助けることも重要だと思っている。そしてそれは、管理社会化した市民社会からの逸脱であると本文に書かれているところも読み落とさないようにしたい。そうした内容になっている選択肢は④で、これが正解。

①は「かんを蹴って友を助ける行為は仲間を哀れむ思いの高まり」とあるが、本文では「つかまった仲間を助けなくちゃって、夢中になるのが楽

しい」とあり、「哀れむ思いの高まり」ではないので×。

②は「かんを蹴ることそのものに対する喜びに根ざしており」とあるが、これも①と同様の理由で×。

③は「心身が汚れていない自己の発見に起因」とあるが、本文には書かれていないので×。また「相互的共同性を強いる社会から逃れる」とあるのも、本文の内容と正反対で×。

⑤は「一人で生きる孤独への不安に由来する」が本文にない記述であり、また「私生活主義を温存する社会」という表現も本文にない内容なので×。

正解 9 ④ (8点)

問6 基本～標準

この文章の特徴に関する説明として適当なものを、二つ選べ。

昨年まで三年続けて出題された「論の進め方の意図の説明」を求める問題ではなく、今年は「文章の特徴」を問うものだが、内容的には「論の進め方」を問うものとそれほど変わらないものなので、特に傾向が変わったとはいえない。ただし、昨年のA群B群の中からそれぞれ答えを選ぶ形式から、選択肢六つの中から正解を二つ選ばせる従来のオーソドックスなスタイルに戻った。

こうした論の進め方の問題は、基本的に選択肢を読み、比較しながら消去していく形で解いていくのがやり方としては正しい。特に今年は①と②、③と④、⑤と⑥とがペアになっているのは一目見てわかるので、どのペアの中から正解を二つ選ぶかがポイントになる。

まず、最初のペアである①と②は、それぞれ間違いの箇所があり消去できる。①は「いかに数多くなされてきたか」とあるが、藤田省三の論を取り上げたのは、同種の研究の数の多少を言うためではない。藤田氏の論を下敷きにして筆者の論を展開していくためであり、その意味で②の「反対の立場からの考え方」というのはまちがっている。

次のペアである③と④では、「小学六年生の男の子から聞いた話」をなぜ取り上げているかの理由として、④で「大人と子どもの考え方の違いを浮き上がらせるため」とあるのが×。ここでは、③にあるように「筆者の論に現実性をもたせるため」であり、問5でみたように小学六年生の男の子の話は、筆者にとって結論を導き出す重要な援軍となっている。

最後のペアである⑤と⑥では、⑤の「子どもの遊びがもつ本質的な意味や性格を表す比喩」として、現代人にとっての『市民社会』や『管理社会』を取り上げている」が×。この書き方だと、「市民社会」や「管理社会」のほうが比喩であることになってしまう。しかし、本文で書かれている内容

はそれとは逆で、「市民社会」や「管理社会」の比喩（正確には「象徴」として子どもの「隠れん坊」や「かんけり」などの「遊び」があるというべき。「比喩」という言葉に惑わされてこの選択肢を選ばないようにしたい。

ただし、この⑤は少しわかりにくいので、⑥が内容的に確実に正しいということにおいて正解とし、わかりにくい⑤のほうを落とすというやり方もある。ただ、できれば⑤の内容がまちがっていることを理解して×できる力をつけてほしい。

正解

10

11

③・⑥（順不同）

（各4点）

第2問 小説 加賀乙彦「雨の庭」

〔総括〕

出典は加賀乙彦「雨の庭」の一節。内容的には住み慣れた愛着のある家や土地から離れる際の、主人公の「彼」やその父親の心情を描いたもので、昨年の夏目漱石『彼岸過迄』に比べると、今年は登場人物の心情や場面の転換なども読み取りやすいものであった。

文章の分量としては昨年より増えてはいるものの、読み通すのにそれほど苦労はしなかったはずだ。ただし問1の語句問題はやや難しく、また心情問題で読み間違いをする可能性があるので、細心の注意を払った読解を心がけて失点を防ぎ、高得点を狙いたいところだ。

問1は標準～難。語句問題は文脈判断より辞書的な意味が優先するが、今回問われている語句はやや古い慣用表現が多く、受験生にはあまりなじみのないものだけに知識の差が得点差となって表れることになる。問2は標準レベルの問題。本文の内容を問う最初の問題だけに、前書きも重要なヒントになる。前書きに書かれている場面や状況、人物関係などを整理してから本文に入るようにするのがコツだ。問3も標準レベルだが、この問題は前後に解答の根拠がなく、文章全体を見渡す視野の広さが必要な問題といえる。問4は基本レベルで、前後の文脈を正しく読み取れば正解できる。問5は標準レベルだが、置かれている場面・状況と「彼」の心情を正確につかみ、選択肢を吟味しつつ消去法も併用して慎重に正解にたどり着きたいところ。問6は基本～標準レベルで、誤りの選択肢を消去法で落としていけば正解の二つにたどり着ける。

問1 語句問題

語句は三つとも慣用表現で、「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書的な意味を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターン。今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日ごろからいろいろな媒体を通して慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。

(ア)の「無聊に耐えられなかった」は、①「退屈さが我慢できなかった」が正解。

文脈的には、②など他の選択肢も当てはまるように思えるが、どれも辞書的な意味を正確に押さえていないので×になる。「無聊」は「何もすることがなくて退屈なこと」の意味。

(イ)の「沽券にかかわる」は、③「自分の体面がそこなわれる」が正解。

「沽券」は「人やものの値打ち」の意で「沽券にかかわる」と慣用表現で使う場合が多く、その場合は「体面や品位に差しざわりがある」という意味になる。ただし、今回は辞書的な意味を知らなくても文脈判断で正解できる。直前に「元重役であるからには」とあるので父が気にしているのは「体面」だと判断できるはずだ。

(ウ)の「後片付けのはかは行かず」は、⑤「後片付けが順調に進まず」が正解。「はかが行く」というのが「はかどる」のことだとわかれば簡単だが、そうでないと文脈的には①や②や③を選んでしまうかもしれないのでかなりの注意が必要だ。

正解 (ア) 12 (イ) 13 (ウ) 14 (エ) 15 (各3点)

問2 標準

傍線部A「そんな一同の動きに終始無縁でいたのは父である」とあるが、「終始無縁」でいた父の心情について「彼」が想像した内容とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを選べ。

本文の内容を問う最初の問題だけに、書かれている内容をしっかりと把握してから解答するようにしたい。その場合、前書きも重要なヒントになるので、前書きに書かれている場面や状況、人物関係などを整理して自分の頭の中に小説世界を想像し終わってから本文に入るようにするのがコツだ。

ここでは、長年住み慣れた家屋敷を手放して高層住宅に引っ越す日のことを「彼」が回想している場面で、問われているのは「終始無縁」でいた父の心情である。本文では、傍線部Aの手前に父以外の眷族けぞくはサヨナラ・パーティーに浮かれていた様子が描かれている。そんな一同の動きに終始無縁な父はどんな気持ちなのかという問いだが、「彼」が想像した内容とはどのようなものか」と問われているところに注意したい。

傍線部Aの次の段落に、「その時父が何を考えていたかを彼はおぼろげに分るような気がする」とあり、続けて「父の七十年の全生涯はこの一軒の家で過ぎたのだ。それが今確実に消えようとしている、その気持を表現するのなら黙り込む以外にないのかも知れない」と書かれている。したがって、ここで「彼」が想像した父の心情とは、「七十年の間過あかしてきた家がなくなることへの失望」とまとめることができる。

選択肢を見ると、①の「引越しせず居続けたい」は本文にない記述で×。

②は「陽気なパーティーの開催に違和感を感じている」とあり、父の心情の向かう方向を間違えているので×。傍線部の前後の様子から、父の気持ちを手元に類推してはいけない。

③は「七十年間を過ごした家がなくなる」ことは「生きてきたことの証あかしも失われるかのよう

に思っている」とあり、これは本文の「七十年の全生涯はこの一軒の家で過ぎたのだ」に対応した説明になっているのでOK。また、「心が沈んでいる」のは傍線部の後の父の様子から読み取れる。これが正解。

いのも×するポイントだ。

⑤は「気持ちを家族に話しても理解されないと悲しんでいる」とあるが、これも父の心情としては本文中に根拠がなく、「彼」が推し量っている父の気持ちとは相容れないので×。

正解 15 ③ (7点)

問3 標準

傍線部B 「彼は痩せて皺しわの深い、このところ年々小さくなってきた父の姿が火照った眼蓋まぶたの下でゆらめいているのを不思議に親密な思いで見た」とあるが、「彼」が父に対してそのような思いを抱いたのはなぜか。その理由として最も適当なものを選べ。

この問題は前後に解答の根拠がなく、一度選択肢を読んだあと、再び本文に戻って読み進めていくうちに彼の父への思いがつかめてくるというやり方で解かなければならない。その点で文章全体を見渡す視野の広さが必要な問題といえる。

傍線部Bの次の段落から、父の会社勤めの時代の話が始まる。その内容を読むと、まじめで精勤の甲斐かひがあつて生命保険会社の取締役にまで出世した父の姿が描かれている。ただ、定年後は日々なすこともなく、再就職もかなわないまま失意の中で急速に老け込んでいく様子が、続けて描かれている。

「彼」が父と焚火をするのは幼年時代以来久しぶりであり、そこで彼が抱いた思いというのが傍線部Bの内容であることを考えると、彼の父への思いというのは、かつての元気だった頃の父と、今日の前にいる老け込んで小さくなってきた父とを比べて出てきた思いであるとわかる。また、今の彼が父へ抱く「不思議に親密な思い」というのがどのような思いなのかを考えると、かつて幼年時代には遠い存在だった父が今は近くに思えるということなので、「父への親愛の情」と考えられる。

こうした読解を前提に、選択肢を見ていこう。①は「頑固な性格」「周囲に合わせざるを得ない弱さ」が本文にはない記述で×。また、「今の自分と二重写しになって見えた」というのもまちがいの記述で×。

②は「老いた今も昔と変わっていないと懐かしく思われた」とあるが、これはまるで逆の内容。昔と今とでは彼にとつての父の姿は大きく変わって映っている。

③は「楽しい思い出として眼前によみがえってきて」が×。そうした記述は本文にない。

④はそもそも前半部分がこの焚火のシーンの彼の心情との説明としてズレているうえに、「父への反発が薄らいだ」とあるのが完全に×。彼が父に

対して反発していたとは書かれていない。

正解は⑤。かつての父の姿は「社会的地位もあり輝いていた」のであり、今の父の姿は「失意の時期を経て今は老い衰えている」。そしてそんな父と焚火をするうちに「父がいとおしく思われた」という説明になっている。

正解 ⑤ (8点)

問4 基本

傍線部C「子供の時のほった木です」そう答えると自分の個人的回想が相手には無縁のことと気づき彼は顔をしかめた」とあるが、ここでの「彼」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを選べ。

場面と状況を理解し、「彼」の心情を的確につかんで正解にたどり着く問題。

ここでは、土地の下見に訪れた品の良い爺さんである「理事長」が、家に生えている木を見て「木が沢山ありますな」「この辺では珍しい」と言ったのに対して、傍線部Cのように彼が答えたという場面。

初めて会う理事長に対して、「子供の時のほった木です」と答えてしまった彼は、「個人的回想が相手には無縁」だと気が付き「顔をしかめた」とある。この流れで考えると、彼が顔をしかめた理由は「初対面の人に個人的で無縁なことを言ってしまったって恥ずかしかったから」と判断できる。正確には「顔をしかめる」というのは、「苦痛や不快感」のあるときなので、「恥ずかしい」というよりも自分の言葉に対して「苦々しく思った」というほうが正しいだろう。

選択肢を見ていこう。

①は「今みた流れをつかんでおり、「自分の言動を苦々しく思っている」というのも「顔をしかめた」に対応する説明として申し分ないのでこれが正解。

②は「樹木の生い茂った広い庭のある家への愛着」とあるが、ここまで踏み込んだ内容は傍線部からは読み取れない。また、「土地の売買という目的からそれた発言が場の雰囲気壊す」「困惑している」とあるのも×。

③は「売買に消極的であると誤解されるかもしれない」「成りゆきを危惧している」が×。ここでの彼の気持ちの対象は土地売買の成り行きが主たるものではない。

④は「それでも相手が不快感を示さなかったので、心苦しさを感している」という箇所が×。傍線部Cは相手の反応を受けてのものではない。

- ⑤は「心を許して」とあるが、本文からはそうした彼の気持ちは読み取れないので×。
- 正解 17 ① (9点)

問5 標準

傍線部D「障子をおえて襖ふすまに手をかけたとき彼は不意に空むなしさを覚えた」とあるが、なぜ「彼」は「空しさを覚えた」のか。その理由として最も適当なものを選べ。

傍線部Dにいたる話の流れをまとめてみよう。

とんとん拍子に土地売買が進み、彼も父も感傷を覚える暇もないまま引越しの日を迎える。最後の焚火を父と彼の二人で燃やしているときに、彼の心の中に「一種狂暴な衝動」が起こってきた。どうせ他人に壊されるなら家の中の燃えるものは全部自分の手で燃やしてしまえ、という衝動である。次から次へと燃えるものを荒々しく火の中に投げ込む彼に対して、父は「身をよけただけで何も言わなかった」と書かれている。その後、傍線部Dが引かれ、設問はなぜ「彼」は「空しさを覚えた」のかを問うている。

ここでのポイントは、それまである程度理性的な態度を見せてきた彼が、「一種狂暴な衝動」に駆られて燃えるものは全部燃やしてしまおうと、荒々しくいろいろな物を火の中に投げ込むという行動にでたあと、「不意に空しさを覚えた」という心境の変化をなぜ起こしたのかである。選択肢で、そのときの彼の心情を説明した部分だけをあげみよう。

- ①では「家への愛情を示すことに何の意味も見いだせなくなったから」
- ②では「息子として家を受け継ぎ保持することができない無力さを感じたから」
- ③では「この家の歴史を消滅させることになる」と気づき、罪悪感を覚えたから」
- ④では「家を愛惜する自分のやるせない思いのはけ口にすぎないと気づいたから」
- ⑤では「乱暴に振る舞う自分に対して嫌悪感を抱いたから」

このなかで、彼の家への思いというものがない②と⑤は×。家のもので燃えるものは全部燃やしてしまおうとする彼を突き動かしている衝動は、家への愛情の裏返しである。

残った選択肢では、①の「何の意味も見いだせなくなった」は言い過ぎで、また「他の家族に背を向け」というものもおかしい。心配して戻ってきた妻と彼とは会話を交わしている。

③は「この家の歴史を消滅させる」「罪悪感」がズレた内容で×。彼個人の家への愛情が問題であって、家族全員に対するものではなく、また「歴史の消滅」への「罪悪感」を覚えて空しくなったわけではない。

正解は④で、ここでの彼の「空しさ」の中心は、家への愛情の裏返しとして衝動的にいろいろなものを燃やしていたが、実はそれは自分のやるせない思いのはけ口に過ぎなかったと気がついたことによる。

正解 18 ④ (9点)

問6 基本ノ標準

この文章における表現の特徴についての説明として適当なものを、次のうちから二つ選べ。

新課程になってから、小説の最後の問題はこうした「表現の特徴」について問うものが連続して出題されている。また昨年同様、今年も正解を「二つ」選ぶ形式になっている。解法としては、選択肢を要素に分けて○×を付け、基本的に消去法で解くのが確実。また、選択肢同士を比較して解くという視点も有効だ。まちがいの選択肢と、×が付く箇所をあげていこう。

①は前半はOKだが、「必要に応じ周りの人物の視点も取り入れて」とあるところが×。この文章では最初から最後にいたるまで「彼」の視線と心情に寄り添って描かれている。

②は「土地売買の現実を拒絶しようとする『彼』の思い」とあるのが×。彼の愛情の対象は長年住み慣れた「家」であり、売買対象である「土地」ではない、ということの説明として()が付けられているのであって、「土地売買の現実を拒絶しようとする『彼』の思い」のためではない。

③では「のだ」「のである」という文末表現は、「彼」の判断が「客観的に見て妥当であること」を示すため」とあるのが×。この文章が主人公である「彼」の主観的な視点で書かれている限り、「客観的に見て妥当」であるかどうかを示す必要はまったくない。これはこの文章に限らず、小説全般に言えることなので注意。

⑥は会話の「」に着目した説明だが、本文を見てもどの登場人物が話したかで「」が付いていたり付いていなかったりという区別はされていないので×。

残った④と⑤の説明は過不足なく特に×が付く箇所がないので、この二つが正解となる。

正解 19 ・ 20 ④ ・ ⑤ (順不同) (各4点)